

---

# 食玩のおまけを目指します！

ねむこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

食玩のおまけを田指します！

### 【Z-ONE】

Z-279Z

### 【作者名】

ねむ二

### 【あらすじ】

才色兼備の彼女と一緒に異世界に召喚されてしまった私、木下桃子。だけどそこで必要とされたのは彼女だけだったという、 “おまけ” にもなりきれなかつた私が流されていく予感のするおはなし。

お菓子についてくる玩具。  
おまけ。

欲しいのはお菓子ではなく、おまけ。

そんな、誰かに欲しいと思つてもらえるおまけを目指していくつ

豪華な馬車のソファの上、ふつかふかのクッションに埋もれてそう  
決意した今日この頃。

目の前にはハフュナシア王国の第一王子と第二王子に挟まれてティ  
ータイムを楽しんでいる女性がいる。  
長く艶やかな黒い髪と知性に輝く黒い目をした、すらりとした感じ  
の和風美人。

黒いタツミと赤いラインの入った冬用の黒いセーラー服を着た唯ヶ  
丘高校2年の桜川清乃さん。

実家は地元でも有名な由緒正しき神社で、本人は巫女さんである。  
そんな巫女属性ぱりぱりの彼女が異世界に召喚されてやることとい  
えばもちろん 巫女。

巫女パワーでの回復魔法と防御魔法が得意分野で、魔王を弱らせる  
ことができる特別な魔法が使えるこの世界にただ一人の存在。  
つまり、彼女は必要とされて召喚されたわけである。

私はといえば桜川さんと同じ制服を着てるだけの、小柄で地味なう  
え名前も木下 木下(きのした) 桃子(ももこ)なんていう平凡で特徴のない高校2年生。  
特技はどこでも眠れること。まあこんな特技、勇者のパーティには

必要ないよね。

そんな雲泥の差がある桜川さんと私との接点なんて微塵もなく、召喚された瞬間ただ単に下校時刻が重なつて隣にいただけだった。

召喚されたときに見た、王様たちの戸惑つた顔は今でも思い出せる。ささつと二人の顔を見比べ、私を無視して笑顔で桜川さんの方へ集まつていく中世ヨーロッパの王侯貴族のような煌びやかな男たちと魔法使い風なおじいさんに、召喚された驚きや恐怖よりも呆れの方が強かつた。

始まりからしてそんな私には何の力もないのか、期待されていないうのが明らかに扱いだつた。

期待されてないならされてないで構わなかつたんだけど、これから桜川さんが勇者たちとの危険な旅をしていく間おまけが安全なところでのうのうとしていることが我慢ならなかつたらしい王様が素晴らしい「提案をなさつてくれました。

与えられたのは巫女の従者といつ役目で、やることは荷物持ちと巫女様のお世話だった。

桜川さんは頑として断つたらしげけど、桜川さんのいないところで王様王子様はじめ桜川さんの取り巻きたちに脅し半分、いや脅し十割で迫られてチキンな私は断り切れなかつた。

最終的に、何らかの理由をつけて国から身一つで追い出すと言われたら、お金もないうえ魔法で言葉が通じてる身としては頷くしかなかつたと思う。

決まったことを知つた桜川さんは、そんなのしてくれなくていいからね?って優しく言つてくれたけど、桜川さんの後ろにいる人たちを見逃してくれそうになかつたし、それに一晩眠つて気づいたのは桜川さんと一緒にいるほうが元の世界に帰れる可能性が高いかもしないこと。

なんてつたつて生糸の巫女さんなんだから。  
あとはあんなところに一人はちょっと、ね。

そもそもあんなところで私を気に掛けてくれたのは桜川さんだけだつた。

でも、細くてモデルみたいに背の高い桜川さんの隣に並ぶと、高さとか横幅の差が強調される気がしていつの間にか間隔をあける癖がついてしまつていた。

それを不思議そうにしていた桜川さんは鈍感なのか、何かの遊びのようになつては近づいてくるようになつてしまつておちおち余所見もできなくなつたのは誤算だ。

そのおかげで毎日のティータイムにも参加するはめになつて、現在も王子一人には冷たい視線を見舞われている。

ただ、この旅で一つ救われたのは勇者さんたちまでもが露骨ではなかつたこと。

役に立たない私より桜川さんを優先するけど、同情もされている、そんな感じ。

ふと、召喚される直前のことを思い出した。

傘を持つてなくて、小雨が止むのをぼんやり待つてた。  
隣に立つた桜川さんに、傘ないの?って聞かれたあの時。

見上げた桜川さんは雨が好きなのか、どことなく嬉しそうだった。

「桃? どうしたの?」

はつとカップから視線を上げると、心配そうに見つめてくる桜川さ

んと目が合つた。

「「ひひひん、何でもないよ。少し、思い返していただけ。」

またカップに視線を落としてカップの縁を親指の腹で軽く擦る。

「・・・ねえ、桃。もう少しで魔王との戦いになると思ひけど、桃は待つてた方がいいと思う。」

真剣な表情を浮かべる桜川さんを見つめたまま、ぎゅっと持つた私のカップはかなりぬるくなつていた。

「キヨノ、それはできないよ。従者の務めとして彼女も最後まで連れて行くんだ。」

「そうです。キヨノはこの世界に一人しかいない、貴重で大切な人なんですよ?」

暗に桜川さんが危なくなつたら従者わたくしを盾にする気満々と受け取れるんですけど・・・

私の気のせいではないらしい意味に、両側から王子一人に諭されていた桜川さんのこめかみに青筋が浮かんだ。

ふつと笑つて音も無くカップをソーサーに戻し、ゆっくりとソファに凭れかかつて腕を組んだ姿はあるで魔王（見たことはないけど）みたいだつた。

「それなら、私にとつて桃がそつなんですよ?」

先ほどの王子たちよりもさらに冷たい、凍りつくような視線で見つめられた二人が瞬時に固まる。

「何度も申し上げたはずですが、つまつその頭は飾りだったのですね？」

そこで解凍に成功した第一王子が高さに余裕のある馬車の中で立ち上がつた。

「で、ですが貴女の価値は彼女とは……」

回復魔法と防御魔法が得意分野というだけで、桜川さんはそれ以外も使える。

恐ろしいことに巫女パワーでの攻撃魔法はこのパーティの魔法使いさんを越えるくらいあり、それを知つてるのは見せてもらつたことがある私だけだった。

その中でも第一王子の喉元に漂う黒い霧は桜川さんの独自魔法で、戒めの鎖というとても素敵な名前を持っている。

この魔法は体ならどんなところでも封じることができるのでぐれもので使われた身としては合掌したくなるものだった。

「しばらく黙つてくれる？」

桜川さんがそう言つて一警すると、黒い霧が集まつて第一王子の首に巻きつき一本の黒い線になつた。

口をぱくぱくしている第一王子から声は聞こえない。

何が起きたかわかつていない第一王子は口を押されて第一王子と桜川さんを交互に見ている。

せつかく解凍できた第一王子も、それを見て再び固まつていた。

ラストダンジョン  
魔王館に入る前の晩、みんなを氣絶させた桜川さんに大切なことを聞かされた。

それは、少し前から薄々わかつていたことだった。

膝下まである黒い冬用セーラー服を着たキヨは魔王ではなく、古い洋館の奥で対峙した本物の魔王は絶対イングランド派であるうつ真っ白な肌に赤い目をした銀髪の貴公子だった。

「覚悟しろ魔王！ 今日で終わりにしてやるぜ！」

「世界の平和のために！」

「ほつ？ 話し合ひもせぬうちに剣を抜くとは、人間とは野蛮だな。」

嘲るような笑みを浮かべ、小さな動作で勇者のパーティから王子たち、キヨとの隣に立つ私を眺め回して魔王は言った。

「平和が欲しいならくれてやるぜ。ただし、その小さい方の女を寄越せ。」

「断る。」

ぴしゃりと即座に断つたのは勇者でもパーティのみんなでもなく、もちろん一人の王子でもない。

腕組みをしたキヨだつた。

「そうだね、世界の平和と比べるまでもない。彼女で手を打つてくれるというなら彼女を渡して・・・え？」

魔法使いのクリヤスがキヨを振り返る。  
理知的なハンサムも今はぽかんとした顔になつていて。  
みんな似たような顔をしている中で、キヨ一人だけが魔王と睨み合つていた。

「見たところ人間の女のようだが・・・貴様、男か？」  
「だいせーかい。」

キヨが唇の端を上げて言ったその言葉に、魔王以外のみんなの顔色が変わる。  
奇妙な顔になつたみんなを見て、私がキヨの「」とに気づいたときはそんなに驚かなかつたのを思い出した。

「ふうむ、人間のやることはわからんな。何故そのような格好をする？」

「単に親の方針だよ。おかげでこの世界に召喚されたときもこの姿だつたせいで面白いくらい間違われたけどね。ま、そこは桃に悪い虫がつかなくて助かつたよ。」

そう言って皮肉げに微笑み、呆然とした王子たちをはじめ武器を取り落とした勇者たちも順に見回してからまた魔王に向き直る。

同じく見回していた魔王が一つ頷いた。

「見る目がないというのは憐れだな。だがどうする？こんなところでやつらに知られては国に帰りにくいのではないか？」

「それはまあ・・・でも元の世界に帰れないことは調べがついてるし、これから桃と二人で住むところでも探すよ。」

「どうか、なら此処に住むといつのはどうだ。この館、部屋数なら

腐るほどあるからな。」

「・・・素晴らしい提案だが桃はやらんぞ。」

「それは、どうかな?」

しばらくお互いを見合つて同時にふつと笑う。

心の友でも見つけたみたいな二人はこっちへ置いとくとして、帰れないことは初めて聞いたんですけど・・・?

こつして唯一魔王に対する切り札を持つてたキヨが魔王側についたことで人間側の勝率は0になり、その後魔王と人間、双方無闇に干渉しないと約束して勇者たちは放心状態の王子たちを引き摺つて帰つて行つた。

食玩のおまけを目指して手に入れたのは、お菓子と外箱だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7279n/>

---

食玩のおまけを目指します！

2011年1月11日09時06分発行